

日蓮教學に於ける開會思想

上 田 本 昌

法華經所説の優れた法門に「開會」がある。これは方便品に於て佛が舍利弗に「如來但以一佛乘故爲衆生説法。無有餘乘若二若三^①」と説いているのに依つたものであつて、即ち會三歸一が如來出世の本懷と言われる法華の開會である。此の文の一佛乘 buddha-yāna とは、諸法の實相を究盡した唯一無二の立場 ekam eva yānam とあつて、佛の根本的な立場を意味するものであり、會三はこれ以外の第二若しくは第三の立場は存在しないと言ふことを示すものであるが、古來天台ではこれを聲・緣・菩の三乘に配當し、また三車四車の論もあるが、何れにもせよ開會とは、諸法のあらゆる立場を開顯し、これを佛の根本的な唯一の立場に會し、以つて一如實相の展開を望もうとするものであると思われる。今、本論に於ては、こうした開會思想を持つ法華經をもつて、教學の所依とした日蓮聖人について、これが如何に取扱われていたか、その一端を觀察してみようとするものである。即ち、最も重要視されている開會の思想が《法華經の行者》を以つ

て、自らを任じられた聖人の上に、どのような形で反映して行つたであろうかと言ふ問題である。

先ず聖人は、『顯誦法鈔』の中で小乘經典所説の理は、一應これを無常・空にありとし、大乘經典の理は中道なりと論じ、就中、諸經典に説く「中」の理は未開會であるが故に、未だ眞に中道實相の理を示したことはないとし、これに對し「法華經の理は開會の理、記小久成これあり」(二七二)と述べ、未開會にして記小久成の顯されていない經典は《法華(已前)》のものであつて、衆生の根性不融なるが故に依るものであるとしてゐる。即ち爰では、初めに法華の理が開會に在ることを先ず明らかにし、續いてその開會の理は《記小久成》によつて示されるものであることを指適している。此の記小とは、方便品以下の諸品に於て説示されている二乗作佛であり、天台は『玄義』の中で根性の融不融に約して、法華の二乘開會を論じ、聖人は『開目鈔』の中で「法華に二箇の大事あり」と述べ、記小久成の有無によせて、諸乘を「於二佛

乗「分別説レ三」の教とし、法華を「開方便門示眞實相」の實乘なりと判じ、以て開會の理を明らかにしている。此の二乗開會は、更に「開三顯一」と呼ばれる三乘開會に通ずるものであるが、此等の二若しくは三乗を開き、「一なる立場」を顯すと云うのは、結極すべての諸法を開會して、唯一なる實相の本有に還歸せしめることを意味するものと考えられる。即ち法華の立場から見るとは、すべての諸乘は開會されて一佛乘となり、そこに一如されるものとみなすことが出来る。故に聖人は此の思想に根ざして、法の開會とそのままに法の一如を圖つたものと考えられるのであり、二乗作佛によせて人と法の開會を明らかにし、「二乗作佛なくば、一念三千の法門も顯れず」と言う立場を主張するものである。また『一代聖教大意』の中で聖人は、般若の法開會をとり擧げ、「少々開會の法門を説く處もあり」（六四）としているが、然し二乗所學の法門は開會していても、二乗の人と惡人とは開會されていないと評している。これは般若の法開會が眞にその意義を放つのは、法華に於ける開會の具體的實證を待つて初めて考えられるとする意圖によるものではなからうか。

次に、かかる記小に續いて「久成」の法門であるが、これも記小と同様に法華の二大法門として、共に重要たることは無論であるが、聖人は「いまだ發迹顯本せざればまことの一念三千も顯れず、二乗作佛も定まらず、水中の月を見るが如

し。」（五五二）との見解に立ち、記小久成二箇の大事と言いつつも、尙「久成」に、より重きを置いていることが知れるのである。爰に法華經前半に於て説かれた開會の理は、後半の開近顯遠によつて、その意義が活きたものとして取扱われ、開會思想の開華結實を見ることが出来るのみならず得るのである。更に、久成の法門に於ては、端に能化の久遠が顯示されたと言ひのみでなく、所化の本地も同時に開顯されたものとするのであつて、即ち本化久遠の佛子として師弟共に遠近の開會がなされたことにより、「まことの一念三千も顯れ、二乗作佛も定まりて」發迹顯本の意義が完成したものである。要するに方便品に於ける十如實相の理によつて二乗作佛が説かれ、横に十界同體の普遍的實在を論じ、更に壽量品に於て、佛の始成正覺によせ、豎に十界常住たる本覺の無始無終なる價值を論じ、以て人・法共に絶対開會の立場がとられたのである。先きの記小によつて示された理論としての開會は、本門に於て普遍常住の師弟として一如し、「所化以同體」の實際の開會へと昇華したものと解することが出来る。所謂、二乗作佛を中心とする（理の開會）から、壽量顯本に重きを置く（事の開會）への展開に、聖人の開會思想に於ける一つの特色が窺えると思ふのである。此の（事の開會）による本化佛子としての立場は、又壽量品所説の「遣使還告」たる本佛の使者として、聖人はその自覺的實踐行動の上に、具

體化して行つたのである。(法華經の行者)と云うことばが、最も端的に此の事實を物語つてゐるものと言えよう。聖人はこうした法華の開會思想を、理論としてはもとより、更に「皆歸妙法」を目して實踐化することが、本佛から與えられた本化としての使命である、と考えられたのではないかと思えるのである。

佛一代の教法を判釋して、純圓獨妙を以て正爲となし、「法華經は能開」(四九一)の義であると言ふ立場に在る聖人は、爾前に於ける所開の法門はすべて法華に至り、「開會の後佛因となる」ものと解している。『三世諸佛總勘文教相廢立』には、頓・漸・圓の三教について、これを一代聖教の總の三諦と言ひ、その下に一代聖教を開會して「只一の總の三諦と成す時に佛を成ず、此を開會と云う」と述べ、更に「三世の諸佛と一心和合して妙法を修行し、開悟すべし」と結んでゐる。従つて聖人の教學に於ける基盤は、萬法を開會して法華一乘の立場に歸入せしむる所に在つたのであり、天下萬民をして「實乘の一善」に入れしめようとする立正安國の理念も、爰から發したものであると言えよう。こうした聖人の開會思想は、直に實踐行動の上に反映し、破邪顯正と云う具體的な形として現されて行つたのである。即ち、破邪は折伏であり開方便門であつて、顯正は示眞實相による實乘歸一を意味するものである。故に聖人の折伏は、一般に誤解されやすい端な

る排他的な立場からの行動ではなく、權教開會の前提として實施せられたものと解しうるのである。故に相對妙と絕對妙の二妙を立て、相對妙では約教約部の法門を釋して佛敎の勝劣を判じてゐるが、次の絕對妙にはそうした勝劣判を用いず、専ら開會の立場がとられてゐる。即ち「絕對妙と申は、開會の法門にて候也。此時は爾前權教とて嫌ひ被_レ捨_テ所の敎を皆法華の大海に收_ルる也。隨つて法華の大海に入ぬれば爾前の權教とて無_レ被_レ嫌_ル者一也。」(二四)と絕對開會の立場をとる法華の大海に於ては、總ての河川が大海に向つて流れ、海中に於て一味となる如く、法華の大海歸入後には、徒らにこれを排折すべきものではないことを明らかにしてゐる。「大海に入て後に見れば日來惡し善と斥ひ、用ひけるは大僻見にて有けり。被_レ斥はるゝ諸流も、用ひらるゝ冷水も、源はただ大海より出たる一水にて有けり。」(二五)と言うのであつて、海水の一滴に四海の水を接收するが如く、「諸水入海同一鹹味」であり「皆是法華の妙體」にほかならないのである。蓋しこれは壽量品に於ける「諸所_レ言說、皆實不_レ虛」の開會を釋したものと解することが出来る。

是に依つて考えるに聖人の開會思想は、あくまでも法華經所説の開會に立つて、純粹に如來使の自覺を持ち、つぶさにそれを實踐化されて行つた所に、開會に於ける理から事への意義が窺えると思ふのである。即ち、聖人の生涯は、開會の

爲の破邪であり顯正に終始したものであつて、その實踐の目標は日蓮教學に一貫して流れている皆歸妙法の理念に、最も密接な關係を持つものと言へるのである。若し然りとすれば、聖人の破邪折伏はすべて法華の開會思想を背景として現れたものと云える。故に折伏の裏面には必ず顯正がおこなわれてはいるが、それは端なる否定・排他ではなく、開會の前提としての折伏であり、むしろかかる意味からすれば絶対肯定の立場を持つものであつて、聖人の破邪顯正の活動は、こうした法華の開會の理を、行動の上で實踐化して行かれた現れであると思ふことが出来るであらう。「日蓮の折伏」と言う

とき、一般にはともすると四箇格言が表面に強く打ち出される傾向にあることは、こうした聖人の實踐に於ける内部に流れている重要な開會の思想を等閑に付する爲の現れと言へよう。所謂、相對妙の勝劣判に立つ一面にのみ固執することなく、進んで絶対妙に於ける開會の法門を尋ね、その意義を把握することが、聖人の教學を理解する上の不可欠の要件とも云えるであらう。教學史の上からこうした聖人の開會思想に立脚せる一・二の先師を試みに擧げてみると、心性院日遠（一、五七二—一、六四二）深草元政（一、六三三—一、六六八）等その他の諸師がある。日遠は爲實施權の化導を重く視て、誘引方便として一切諸行を認め、一如院日重（一、五四九—一、六

二八）と同じく絶対判の立場をとつてゐる。又元政も是れと同様に利他教化のためには法華の絶対開會に立つて、折伏も悲願の行相・弘教の方便と解したのである。

是れを要するに、日蓮教學に於ける開會思想は、法華經所説の絶対開會に立脚するものであつて、方便品の開三顯一に事起り、二乗作佛に寄せて十界皆成・諸法實相の「理の開會」が示され、更に壽量品の久成開顯によつて、能所同體・生佛一如の開會に於ける「事の究極」が顯されたことに竟のである。聖人は故に「法華經とは開會の理なり」と論じ、一經の根本を開會に在りとして、その絶対判の立場から、法華の大海に諸乘を歸入せしめる爲の方法として、一切諸行を肯定し、以て「實乗の一善」に總てを歸入せしめることに目標を置き、この實現に聖人の生涯は盡されたものと言ふことが出来る。即ち、聖人はその獻身的信から發する實踐行動によつて、法華經開會の理を色讀することの中に、佛から與えられた使命を果す意義を感得していたものと思ふのであり、皆歸妙法の實踐の開會思想が、聖人の教學に於けるバックボーンであつたらうと考へられよう。

1 大正藏 九ノ一ノ七b

2 拙稿「法華經に現れた佛子について」印佛研一〇ノ二

3 日蓮宗教學史（執行海秀）

4 拙稿「日蓮聖人の信について」日本佛教學會年報（二八號）